



昔々、いま、そして20年未来へ

厚別区支部 田村 正

何気無く国会中継を見ていた。与党の議員が老人への社会保障費に比べて、比較できないほどに少ない小児へのそれを増額せよ、と質問していた。首相は穏やかに、少子化対策のためにも、小児への社会保障関連予算の増額に鋭意努力する、と応えていた。次に野党議員が質問、世界の先進国と比べて社会保障費がこんなに少ない、全体の財政規模から考えて、もっと予算を社会保障関連費にまわすべきだ、と。首相は木で鼻をくくったように、否、乱暴でつっけんどんに、自衛隊の予算を減らしたら、一体誰が国を護るのか、とはぐらかしていた。

「いま」はこんなところで毎日が進行している。幾多の社会経済学者がこの不況を脱出し、経済の回復を進めるためには、社会保障関連事業を発展させるべきであると論じているが、まるで馬耳東風。郵政民営化と経済特区、医療費削減、介護保険や年金改革などによる民からの収奪しか頭にはないかのようなのである。有事関連二法の成立後、更には憲法9条を廃棄して自衛隊の軍隊化、徴兵制の復活まで進めたい意図が垣間見えてきているのではないか。

国民の福利のためにどんな政策目標をたて、実行するのかといえば、そう言ったものはまるで無いのである。北欧型社会主義に学び、社会主義国以上の福祉国家に成長するはずであった日本が気に入らないのか「自己責任論」が声高に主張され、前世紀的、19世紀型の社会に引き戻そうとするアメリカ型の強者の論理が幅を利かせ始めている。

憲法25条が謳う社会保障や良質な医療を維持発展させるのは政治に甚大な責任がある。然るに今の政治にそれを期待することは、「言葉を話す犬」を期待するのと同じだ。国家の政治を

論議し国政を担当することを委託された国会議員は、その仕事は何かを認識しているのだろうか。秘書給与の詐欺、受託収賄、不正な政治資金操作や共済年金、選挙違反、学歴詐称などなど枚挙に暇なき国会議員の犯罪。そして遂には、強制猥褻罪での現行犯逮捕である。全く、「涙の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」とは、語るに落ちる。選挙で当選した以上、選挙民にも責任の一端が無いわけではないし、人間は間違いを犯す生き物であるとしても、あまりといえどもあまりにも情けない姿ではないか。

どんな政党のどういった議員が選出され、どのような政治が行われるかによって国民の生活は全く違ったものになる。過去には軍部の独走を許し、大政翼賛政治に突き進んだ後の歴史を思えば明らかである。日本の軍国化も全く合法的であった。かつて、ドイツ国民がナチスに弾圧され翻弄された時代のことを僧職者が語ったという言葉を想起する。「初めは共産主義者だった。我々には関係なかった。次には、ユダヤであった、これも見過ごされた。更には教職員などであった。これも関係ないと思った。そして教会への弾圧が始まった。その時にはもう遅かった」と。

視座を明確にするべきである。社会保障の根幹は政治に負っている。平和は最高に貴重な国民の財産である。我々は歴史から学んだはずである。経済・医療・福祉を充実発展させるには平和を追求する政治が必要である。平和のために戦がある、とは詭弁である。

「昔々」に起こった沢山の出来事が歴史を作っていく。20年前、1985年には感懐もひとしおである。「ソ連共産党書記長にゴルバチョフ就

任、日本電信電話公社がNTTに、日本専売公社がJTにそれぞれ民営化。プラザ合意（G5＝先進5ヵ国蔵相・中央銀行総裁会議）でドル安円高政策へ。以降、急速な円高が進行し、バブル景気につながった。エイズ流行の恐怖、世界に広まる」

20年前、私は小児科の開業医として独立した。当時老人医療費や小児医療費の補助は僅かであった。経済が発展し社会保障充実への要求が高まり、国民の力が政治に反映されて行った。過去は懐かしむものではなく学び変革する歴史であるのだから、後退は許されない。人知れず収奪するような政治が許されて良いわけがない。流れは「20年の未来」へと繋がる。

混合診療が推進された挙句、「地獄の沙汰も金次第」の近未来にはならないで欲しい。戦争に駆出され、人殺しや破壊を強要される未来にはならないで欲しい。しかし、バブル崩壊後着々と進められて来た社会保障費減、増税や医療費自己負担増、年金給付減の政策は蠢動している。既に「年金改革」を待たずして公的年金給付減は現実である。2か月毎に40万円受給のモデルでは、2005年から①65歳以上の公的年金等控除額が140万円から120万円に引き下げ、②合計所得金額1千万円以下の老人に適用されていた高齢者控除50万円が廃止され、年金の税は2か月4千円が1万3千円超に増税。定率減税が廃止されると、2か月で更に3千円の増税になる、という。まず取り易い所から取る、徐々に拡大する。気付いた時には出来上がっている。といったところが国が民から取り上げる時の極めて合法的なお決まりのやり方。「昔々」との大きな違いは、民主主義が護られ情報が公開され、民の力で民のための政治を行わしめることも可能であること。

折しも経済財政諮問会議は2030年までの「日本21世紀ビジョン」を発表（3月19日）。キーワードは「文化創造・時待ち・小さな官」。アニメやファッションで人を呼ぶ「文化創造国家」、時間にゆとりを持って暮らせる「時待ち」、公共分野で民間活力を引き出す「豊かな公・小さな官」で少子高齢化を乗り切り活力を

維持しようという。しかし、軽薄な文化では国語力も計算力も科学的理解力も減衰。何やら破綻寸前の「ゆとり教育」を思わせる。寝たきりの人は要らない、金は無くとも「自立して」いる人には、時間はたっぷり。もしかして、その頃に生きていて惚けてなかったら何をしようか。財政のスリム化で官の役割が縮小しNPOが主役になるのだそう。税は何のために使われるのか。キャリアは少ない仕事で給与が保証され、民間へ天下り、退職金も沢山、混合診療の恩恵にも浸って居られるのかもしれない。ノンキャリアは権限を利用してせかせかと蓄財に励むのであろうか。小さな官は見かけだけ。何れにしろ、このビジョン「何色の薔薇」に見えますか。新種の青い薔薇？でしょうか。色褪せたセピア色では薔薇が可哀そう。

社会保障費の削減と増税と消費税上げの社会が直ぐそこで待っているというのに、底浅き悪夢のような近未来像を描いて良いものかどうか、思慮が足りない、と思われても仕方ないのではないか。

未来は今日の積み重ねだから、今の情勢の変化に左右される。20年後の医療は民の医療として護られていると思いたい。混合診療の強化など、国民皆保険（1961年）以前への逆戻りは許されない。

子供たちの笑いの声が絶えない明るい未来であって欲しい。引きこもりや猟奇的犯罪の無い社会。繁栄を望むに、徒に経済的欲望を駆り立てることのない社会。そして、よもや世界第2の軍事大国としてアメリカに従属して銃と軍事優先の社会など杞憂にすぎないことを祈りたい。

（たむら小児科医院）